
月の宿る匣

秋月 弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の宿る匣

【Nコード】

N 6 1 1 3 Q

【作者名】

秋月 弥生

【あらすじ】

高橋美咲がある男性と出会ったことで美咲の人生が大きく変わる。ちよっとリアルで純情なラブストーリー！。

第1章 匣 - はこ -

「うーん。やっぱり晴れると気持ちいいな。そうだ！物置のなか無事かな」

連日連夜、不吉なほどに降り続いた大雨は上がり、空には暖かな日差しが戻ってきた。

そんな休日の午後、美咲は大雨で心配していた庭の物置に向かう。

（俺の漫画本とか大丈夫かな。浸水してたらどうしよう…ん？なんだこの匣。こんな匣ここにはなかったはず）

扉を開けると中は無事だったが、見覚えのない匣が置かれていたことに気がつく。

それは、何の変哲も無い匣だったが、紐で頑丈に封印されていた。これは兄が置いたのだと、美咲は兄の孝浩に尋ねることにした。

「にいちゃん。この匣、にいちゃんが物置に置いたの？」

「いや。俺のじゃないよ」

「そつか…って、じゃあ誰の？」

「美咲のじゃないのか？」

「俺こんな匣知らない」

発見してしまったからには、開けずにはいられない。

好奇心に駆られた美咲は、匣を開けてみることにした。

そっと紐を解き蓋を取る。

中は予想に反して空だったが、ただ一枚の紙だけが入っていた。

よく見ると、紙には文字が「その匣に月が宿る時、すべての道は開かれる」

と書かれていた。それは何かを予言するかのよう。

美咲は、これは何かある。と自分なりに思う。だが、どうも理解できず考える事を断念。

そのまま匣を元の場所に置き、扉を閉めた。

第2章 出会い

匣の意味が解らないまま、1週間が経過。

高橋美咲21歳・M大学4年生。4年の春になった今も、やりたい仕事が見つからないでいた。

それどころか、成績も思わしくない。卒業すら危うい状況だ。そんな美咲は日々課題のレポートに追われ、あの匣の言葉さえ忘れていた。

課題のレポートも終盤に差し掛かり、こうなったら集中してやろうと、何時も利用している図書館でやることにした。

美咲は図書館に着くと、辺りを見回して席を探す。館内は思っていたよりも空いていて、席は直ぐに確保できた。

あとは集中してやるだけ。だと、レポートに手をつけるが、すぐさま手詰まりになる。

資料を集めるべく席を離れ、目当ての項目がある棚へと足を運ぶ。さすがに探すのに時間を要してしまったが、なんとか良い本を選ぶ事ができた。

目当ての本に手が届かないから背伸びをする。それでもまだ届かない。

絶対に諦めてなるものか。と手を伸ばしていたら、一人の長身の男が視界に入る。

こうなったら、この人に取って貰おう。と美咲は声を掛けることに

した。

「あの、すみません。この本取ってもらえませんか？俺では届かなくて」

「ああ。はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます。って…イタツ！」

本を受け取った瞬間、この男に右手首を掴まれた。
こんなことをしておいて、その男は至って冷静だった。

「おまえ」

「あの…俺なんか失礼なことしましたか？」

「いや…」

「じゃあ。離してください」

「ああ。すまなかった。つい……」

「いえ…では俺はこの辺で。ありがとうございました」

「美咲」

「えっ!？」

美咲は一礼をして踵を返した時、男に名前を呼ばれ目を丸くする。

「なぜ俺の名前を知ってるんですか？」

「俺は、おまえの兄、孝浩の親友だ」

「って……もしかして貴方が宇佐見秋彦先生！」

「そうだが？」

「うわぁ〜すげえ〜本物だぁ」

この男、宇佐見秋彦はベストセラー作家で、美咲の兄・孝浩とは高校時代からの親友だ。

美咲は兄に、幼い頃から宇佐見のことを聞かされており、作品は読

んでいないが名前は知っていた。

ミ－ハーな気持ちが出て、サインをもらおうとしたら、宇佐見からとんでもない事を云われた。

「成績がよくないと孝浩からきいたが、それは本当か？」

「はい。実は就職もまだ決まっていなくて…」

「そうか。ならば、俺が家庭教師をしてやる」

「えっ！いいんですか？でも…すごく嬉しいんですが、お仕事忙しいんじゃないですか？」

「大丈夫。何も心配するな」

「はい！では宜しく願います」

「ただし、条件がある」

「なんでしょうか。俺にできることがあれば何でもします」

「俺の家で住み込みでやること。条件は以上だ」

「はい。俺頑張ります」

宇佐見と約束を交わし、課題のレポートを片付けるべく席に戻っていく。

思わぬところで想わぬ人と出会ってしまった美咲。

この先、大きな運命が待っているようになど、この時は知る由もなかった。

第3章 同居

帰宅して、兄に宇佐見の事を報告した美咲は、それならば直ぐに行った方がいい。

と云われ、明日から宇佐見の所へ行くことにした。

その夜は、住み込みに必要な物を準備した。

旅行用のバッグに必要な物を、手当たり次第に詰め込んでいく。

あれでもない。これでもない。それはまるで、旅行に発つ者が支度をするように。

翌日、宇佐見が住むマンションに向かった。

地図を頼りに辿り着いたマンションは、高級ホテル並に大きく豪華だった。

エントランスの正面にはオートロックが設置しており、各家々はセキュリティで守られている。

兄から教えてもらった、宇佐見のルームナンバーをゆっくり押していく。

すると、オートロックの小さなスピーカーから宇佐見の声がした。

「はい。どちら様？」

「あ、高橋です」

「美咲か。よく来たね。今ロックを解除する。上に上がってきなさい」

「わかりました」

（やべー…すげー緊張してきた。俺、これから宇佐見先生の部屋に行くんだよな）

これから宇佐見の所に行くのだと思うと、緊張が増していく。エレベーターの中で、掌に「人」という文字を3回書いて飲み込むふりをする。

これは兄から教わった、緊張を解すまじないだ。美咲は緊張した時はこれをよくやるのだ。これのおかげで少しだけ解れた気がした。

宇佐見の部屋は最上階。エレベーターはあっという間に到着してしまった。

最上階の通路を歩いていると、ドアらしきものが見つからない。

奥の方へ行ってみると、ドアを発見した。

そこには、マンションだというのに、玄関の前に小さな門が設置されていた。

何かが変だ。そう思いながら門脇の呼び鈴を押す。

少し待ってから、ガチャリとドアノブが回る音が聞え、宇佐見が顔を出す。

宇佐見の顔を見た瞬間、また緊張が増した。

「中へどうぞ」

「は、はい！」

宇佐見の後に続いて入ると、広すぎるリビングと、マンションとは思えない

部屋数が目に入る。

それに驚き呆然としてみると、宇佐見に座る様に促され、高級そう

なソファに
腰を下ろす。

「今コーヒーを淹れるね。それとも紅茶の方がいい？」

「ありがとうございます。あ、コーヒーでお願いします」

美咲は宇佐見がコーヒーを淹れている間、辺りを見回していた。
これには何か秘密がある。訊きたいけど失礼になる。などと葛藤している、

宇佐見が二人分のコーヒーを淹れて戻ってきた。

「美咲？どうした？」

「いえ、その…あの…」

「ん？話してごらん」

そんな美咲の様子に気が付いた宇佐見は、声を掛けて向かいに座る。
美咲は、深呼吸をしてから質問した。

「あの…失礼なことをお聞きしますが、先生は一人暮らしですか？」

「そうだが？もしかして、広いから同居人が居る。と思った？」

「ええ、まあ…」

変なことを訊いてしまった。と恥ずかしくて赤面してしまう。

そうこうしているうちに、宇佐見が話し出す。

「美咲の成績は見せてもらった」

「みたって、いつですか？」

「まあ。それはどうでもいい。確かにこれでは卒業は難しいな」

「やっぱり…」

「そんなに落ち込むことはない。俺がちゃんと見てやる。心配する

な
」

いきなりクシャッと、頭を撫でられて肩を竦める。
だが何故か、宇佐見の手はとても心地よかった。
こうして美咲は、宇佐見との同居生活が始まったのだ。

第4章 告白

宇佐見と同居して早1ヶ月が経過。

美咲は、勉強を教わったお礼にと、宇佐見の身の周りの世話もしており、

以前よりも充実した日々を送っていた。

課題のレポートも、解らない箇所を宇佐見に教わり、終えることができた。

そして、美咲の成績も宇佐見のおかげで遥かに良くなっていた。

宇佐見は軽い背伸びをして、空になったマグカップを手に書斎を出る。

キッチンでコーヒーを淹れていると、大学に行っていた美咲が帰宅した。

「おかえり」

「ただいまです」

「今日は早かったね。コーヒー飲む？」

「はい。ありがとうございます」

美咲はソファに腰を下ろし、宇佐見の動きをじっと見つめる。

「ん？どうした？」

「あ、いえ、なんでもありません。すみません……」

「美咲、何か言いたそうな顔してる」

「あ、その……あの……」

「話してごらん。聞いてあげるから」

宇佐見はそう言うと、二人分のコーヒーを持ってきてローテーブルに置く。

すると、美咲は愛用のカバンから一枚の紙を出し、宇佐見に手渡した。

「これは、こないだやった小テスト？」

「はい。今日、返されました」

宇佐見は答案用紙に目を通すと、コーヒーを一口飲む。

そして、満面の笑みで美咲の頭をクチャリと撫でた。

「よし！これなら卒業は大丈夫だね。で、残る問題は就職か」

「ほんとですか！よかったあ！これも宇佐見さんのおかげです」

「いや、美咲が頑張ったからだよ」

「そうかなあ…でも、ありがとうございました」

「どういたしまして」

「では、これで俺は自分の家に帰ります。今までお世話になりました」

美咲は深々と頭を下げ、礼を云うと、ソファから立ち上がり自室へ向かおうとする。

だがその時、宇佐見に腕を掴まれ、そのままソファへ押し倒された。

「えっ！なに！？」

「美咲…」

「はなせっ…手、痛い……」

「美咲、おまえはこのまま俺の側にいろ」

「だって俺はもう…」

「俺は美咲なしでは生きていけない。俺はおまえの事が好きなんだ」

「な…なに云ってるんですか。俺は男です」

「そんなの見ればわかる」

「宇佐見さん…冗談ですよ？」

「冗談ではない。俺は本気で云っている。美咲、好きだ」

宇佐見はそう言うと、美咲から離れて書斎に行ってしまった。

美咲はいきなりの告白に頭がついていけず、ただ呆然と天井を見つめた。

この状況では、宇佐見の所に居づらい。そう思った美咲は、何も持たずにマンションを

飛び出す。そして、自分の家まで走って帰宅した。

「あれ美咲じゃないか。おかえり。久しぶりだね。忘れ物でも取りにきたの？」

「そ、そうなんだ。でも、今日は泊まっていく。それじゃ」

「美咲？」

美咲は家に着くなり、兄から声を掛けられるが、直ぐに自分の部屋へ籠った。

到底あんな事があった今、兄の顔がまともに見られない。

ベッドに勢いよく倒れると、宇佐見の言葉を思い出す。

そうこう考えているうちに次第に涙が溢れ、両手で目元を覆った。

「にいちゃん。俺…宇佐見さんの事どうしたらいいか解らないよ…」

第5章 信じられない事実

翌朝、美咲は不思議な夢で目が覚めた。

夢の中で誰かが、匣がどのと云っている部分だけはっきりと覚えていた。

（ハコ…？ そうだ！ あの言葉！）

勢いよくベッドから飛び起きて、急いで身支度をする。

そして、昨日あれほど考えても答えが出なかった相手、宇佐見秋彦の元へ向かった。

（どうして忘れてたんだろ。もしかしたら宇佐見さんなら解るかも。って俺なにウキウキしてるんだろ…）

美咲は走った。宇佐見に会いに、ただ必死になって走り続けた。

やっとの思いで宇佐見のマンションに着くと、玄関先で宇佐見が待ち構えていた。

「美咲」

「あつ！ 宇佐見さん。何も云わずに出て行ってごめんなさい…」

美咲は怒られると身を細めていると、ふいに頭を撫でられ抱きしめられた。

「美咲。心配した」

「つて、あれ？怒らないの？」

「ああ。美咲が無事に帰ってきてくれて嬉しいよ」

「宇佐見さん…俺…ごめんなさい…」

「もう、なにも云わなくていい。少しこのままでいさせてくれないか？」

「は、はい…」

美咲の肩が宇佐見の涙で濡れていく。

自分のために心配して、泣いてくれる人が居ることが、美咲には嬉しかった。

美咲はこの時、宇佐見の気持ちに応えてみようと思った。

美咲は宇佐見の背中に両手を回し、ずっと涙を受け止めた。

どのぐらいこのままでいたのだろう。宇佐見は顔を上げてそつと美咲の耳元で囁いた。

「こんな姿を他のヤツに見せたことはない。おまえが始めてだ」

「えっ!？」

「やっぱり俺は美咲なしでは生きられないな」

「宇佐見さん…」

「ん？どうした？」

「俺…宇佐見さんのこと。好きかも……」

「好きかも。じゃなく好き。だろ？」

「ごめんなさい。俺まだはつきり云えなくて……」

「おまえはほんと可愛いな。そんな美咲が好きだよ」

「……………っ」

羞恥でいっぱいになった美咲は、違う事に意識を集中させようと、他の事を考える。

ふと、何かが喉まで出掛かっていたが、それが何だったか出てこな

い。

美咲は眉間に皺を寄せて思い出す。すると、手をポンと叩いて甲高い声を上げた。

「あ！そうだ！」

「いきなりどうした」

「宇佐見さん。この言葉の意味解る？」

「云ってごらん」

「その匣に月が宿る時、すべての道は開かれる。って云っただけど……」

「そうか。アレに気がついてたか……」

「へえ？アレって……」

「それは俺が書いた紙……いや、本の一節だよ」

「あの本って？俺、小説は苦手で読んでない……ごめんなさい」

「いや、いいよ。だったら序に読んでみたらどうだ？」

宇佐見から渡されたのは分厚い1冊の本。タイトルには「月の宿る匣」と書かれていた。

何だか難しそうだと思ったが、せっかく勧めてくれたのだから読んでみる事にした。

内容はタイトルから想像もできないくらい簡単で、美咲にも読みやすい恋愛物だった。

そのおかげですんなり読むことができた。

（つまり、匣が自分自身の心で、月が大切な人ってことか。さてよ、これって俺の

ことを云ってる気がするんだけど……気のせい？それとも似てるだけ？）

脳内がパンクしそうになっていた美咲。ふと後から宇佐見が声を掛けた。

「どうだ美咲。納得した？」

「あ…うん。これって、なんか俺のことみたいで…」

「そう。それはおまえに宛てて書いた作品だ」

「えっ!？」

とんでもない事を言われ、美咲は目を丸くする。更に宇佐見は話を続けた。

「美咲の家の物置に匣があっただろ？置いたのも俺だ」

「なんでそんなことしたの？」

「美咲に俺の存在を気づかせるため。少し回りくどいやり方をしたとは想っている」

「気づかせるもなにも、俺が宇佐見さんと初めて会ったのって、あの図書館だよ」

「やっぱりお前は気がついてなかったか。まあ無理もないな」

「へえ？」

呆氣に取られた顔で宇佐見を見上げた。

宇佐見はキッチンに行き、二人分のコーヒーを淹れてリビングに戻る。戻ってくる。

コーヒーを美咲に手渡して、一口だけ飲んでからテーブルに置く。そして、ゆっくりとソファに身体を預けた。

「俺はおまえのことをずっと見ていた。大学でもあの図書館でも」

「って…宇佐見さん、大学に何の用があって行ったの？」

「実は俺の幼馴染がM大で助教授をしていてね、用があった時に美

咲を見つけた。

そしてあの図書館は俺も利用する。そこでも美咲を見つけてずっと見てきた」

「じゃあなんで、俺の名前知ってたの？」

「以前に、孝浩から美咲の写真を見せられてね、その時に名前も知った」

「にいちちゃん…」

「まさか親友の弟が美咲だったとは正直驚いた。これは運命に違いないと思ったよ」

「俺…宇佐見さんのこと、全然気がつかなかった…」

「まあ無理もない。俺が一方的に思っていたのだから。でも今は両思い。そうだろ？」

「ちよつとまって。俺、まだ何も云ってないし」

「早く自分の気持ちに気がつきなさい。お前はもう俺に落ちていくしかないんだ」

「勝手に決めんなっ！」

「好きだよ。美咲」

「ちよつ…んっ…」

宇佐見は告白するだけしておいて、美咲の答えも聞かず美咲にキスをした。

「はぁ、はぁ…いきなりなにしゃがる！」

「これが俺の正直な答えだ。わかったか？」

「…………っ」

（俺…この人に落ちていくしかないのかな…）

自分の気持ちを認めたくない。男同士で恋愛なんてありえない。と美咲は思っていた。

だが、宇佐見に出会い接しているうちに、その考えも変わり始めていた。

第6章 困惑

突然のキスを受けてから数日間、余計に宇佐見を意識するようになっていた。

成績も上がった今、ここに居る意味が無い。それなのに宇佐見が気になって、自宅に帰る気にもなれなかった。

宇佐見は仕事の合間を見ては、相変わらず美咲を口説きにかかる。そんな美咲も宇佐見に対して、胸の鼓動が高鳴っていることに気がついていた。

（俺、完全に宇佐見さんに恋してる？俺どうしちゃったんだろう。原因はあのキス？

それとも宇佐見さんの優しさ？よく見ると宇佐見さんってカッコいいし、背も高くてスタイルもいいんだよねあ…って俺、ずっと宇佐見さんのことしか考えてない。

そろそろ就職のことも考えないといけないのに…）

「はあゝまじで就職どうしよう…」

ソファで眉間に皺を寄せて考え込んでいると、背後から宇佐見に抱きつかれ押し倒された。

「うわっ!？」

「そんなに驚くこともないだろ。さすがにもう慣れなさい」

「こんなこと慣れるわけねーだろ！第一俺は男だ！」

「まだそんな事云っているのか。そんなこと気にするな。好きなのは事実なのだから」

「俺は気にするの！」

「なぜ？」

「なんでだっついていいだろ！」

（はあゝまったく宇佐見さんときたら、毎回これだもんな。俺もだ
いぶ慣れて

きたけど、やっぱりこんな宇佐見さんを好きかも…）

「ところで美咲」

「ん？」

「さつき就職がどうのと聞こえてきたのだが、まだ決まってるのか？」

「決まったら宇佐見さんに云ってるって…あつ！しまった！」

「ほう。それは、俺のことが好き。と思っていいんだな？」

「なんでそうなる…」

「まあいい。美咲が俺に落ちてくるのも時間の問題です」

「ぜってーありえねえし…」

勢いよく宇佐見を押し退けてソファに座り直す。そして、泣きそう
な顔で美咲は

思っていることを述べた。

「俺、そろそろ家に帰ろうと思うんだ。もう成績も大丈夫だし…」

「なにを云っている。俺にはおまえが…」

「ダメなんだ。ずっとここにいちゃいけないんだ」

「何故そんなことを云う」

「これ以上、宇佐見さんの足を引張ることだけは…」

「おまえは俺に充分尽くしてくれている。感謝しきれないぐらいだ」

「俺は何もしてない…」

「美咲が側に居てくれるだけで幸せなんだ。だからずっと俺の側にいてくれ。」

頼むから俺の前からいなくならないでくれ…」

強く抱きしめられた美咲は、どうしていいか解らず、ただ途方にくれるだけだった。

最終章 月の宿る匣

美咲が宇佐見へ気持ちを伝えないまま、時は流れた。

美咲はようやくやりたい仕事を見つけ、滑り込みではあったが就職も決まり、

宇佐見のおかげで卒業することもできた。

季節は春。美咲は今日から社会人。

そんな美咲は、俺が居ないと宇佐見さん倒れるから。と宇佐見の所に居候していた。

迷っていても、やっぱり宇佐見の側から離れられない自分がいたのだ。

「美咲。よく丸川書店に就職できたな」

「へへ〜ん。俺って、やればできる子。俺って、もしかして天才？」

「なにをのん気なことを云っている。早くしないと遅刻するぞ」

「大丈夫だって」

「美咲。間違えても相川みたいになるな」

「ん？相川さんって、宇佐見さんの編集さんだよ。俺もあんな人になりたいな」

「アイツの真似事だけはやめておけ」

「なんでだよ」

「おまえ確実に倒れる」

「はあ？」

「まあ。せいぜい頑張ってください。新人編集者さん」

美咲の背中をポンと叩いて見送った宇佐見は、不安でいっぱいだった。

た。

このまま美咲が、何処か遠くに行ってしまうそうで。

気を取り直して、残りの仕事に取り掛かる。

数時間、書斎に籠った宇佐見は休憩を取るために席を離れた。

キッチンでコーヒーを淹れていると、インターホンが鳴る。

今日は来客はないはずだ。と思いながらも玄関に向かう。

ドアを開けると相川が立っていた。

「じゃーん。先生。聞いてくださいよ」

「ん？なんだ。また賞でも受賞した知らせか？」

「違いますよ。今日は新しい編集さんを連れてきたんです。と云っても、

まだまだ見習いですけどね」

相川がそう云うと、相川の後ろから編集が顔を覗かせた。

宇佐見は顔を見た瞬間、目を丸くする。

そこに立っていたのは、なんと美咲だった。

宇佐見は驚きのあまり硬直して動けない。

「先生。驚きました？美咲くんが先生の新しい編集さんなんです。でも正式ではなく、

今日から現場みてこい。って上からの命令が出たんです」

「丸川書店、文芸部の高橋美咲です。これから暫くの間。宜しくお願います」

美咲は仰々しく一礼すると、赤面して宇佐見を見つめた。
宇佐見もまた、笑顔で美咲の頭を撫で回した。

仕事とでもまた、一緒に居られるのだとお互い嬉しく思う。

その夜は、昼間のこと今日一日の出来事で話は盛り上がった。夜もだいたい更けてきた頃、美咲は先に寝る。と云いソファから立ち上がる。

宇佐見も一呼吸置いて、そしてそつと口を開いた。

美咲もまた、驚きのあまり目を丸くして自分の耳を疑った。

「美咲。結婚しよう」

「!?!」

「仕事だけではなく、私生活でも俺を支えてくれ」

「な、なにバカなこと云ってんだ！男同士で結婚出来るわけねえだろ」

「知ってるよ。でも美咲と結婚したい」

「はあ？なにそれ」

「明日にでも結婚指輪を買ってくる」

「なに勝手に云って勝手に決めてんだよ。俺は承諾しないからな！」

「早く、俺に落ちなさい」

「ぜってー無理！」

「そういえば、云い忘れてた」

「今度はなんだよ！」

「あの本、月の宿る匣には、もう1つ意味があったのだよ」

「意味？どんな？」

「俺の中に宿る美咲。という意味」

「はあ？なんだよ。それ。意味わかんねーし」

「俺の頭の中は美咲でいっぱい。ということ」

「……………」

「美咲…愛してるよ」

「オイ、コラ離れる！このおゝバカ宇佐見！」

こうして新たに二人の生活はスタートした。

あの時、匣を開けなければ出会わなかったかもしれない。

あの日、図書館に行っていなかったら、一生会えなかったかもしれない。

そんなことを考えても、既に運命の歯車は動き出している。

美咲は、自分を好きだと云ってくれた宇佐見に、素直になってみようと思った。

高橋美咲22歳の苦悩は、まだ始まったばかりであった。

最終章 月の宿る匣（後書き）

「月の宿る匣」を読んで頂き、ありがとうございます。

「月の宿る匣」は漫画原作中で、宇佐見秋彦が書いた作品のタイトルなのですが、これを使用して頂きました。

このタイトルで書いた理由は、どうしても「月の宿る匣」を読んでみたい。どんな話なんだろう。と思ひまして、それを自己流に考えていたらこうなった。という訳です（苦笑）

途中こぎつけない部分があったと思います（汗）

初めあの匣はどう恋愛に繋がるんだろう？と思われたことでしょうか。期待を裏切るような結果ですみません（泣）

やっぱり私にはシリアスでミステリアスな話は書けません（泣）
もっところ、ミステリアスな作品が書けるようになります。

この作品が少しでも伝わっていれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6113q/>

月の宿る匣

2011年2月4日12時52分発行